小高町文化財調査報告第４集

東広畑Ｂ遺跡

２００２年３月

福島県相馬郡小高町教育委員会

小高町文化財調査報告第４集

東広畑Ｂ遺跡

２００２年３月

福島県相馬郡小高町教育委員会

原色図版

第１地点調査区全景

ＳＫ０２遺物出土状況

目　　次

原色図版

目　　次

例　　言

凡　　例

第1章　概　　要 …… 1

第1節　調査にいたる経緯 …… 1

第2節　東広畑B遺跡と周辺の遺跡 …… 1

第3節　調査の概要 …… 4

第2章　遺構と遺物 …… 6

第1節　第 1 地点 …… 6

第2節　第 2 地点 …… 10

第3節　その他の出土遺物 …… 14

第3章　ま と め …… 17

出土遺物観察表 …… 21

写真図版

例　　言

１．本書は福島県相馬郡小高町大字小高字東広畑に所在する東広畑Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

２．調査は町道工事に伴う事前調査として小高町教育委員会が実施した。

３．試掘調査は平成６年１月から２月まで、本発掘調査は平成７年４月から平成７年７月まで、整理調査および報告書作成は平成７年４月から１２月、及び平成１３年４月から平成１４年３月まで実施した。

４．試掘調査、本調査及び平成７年の整理調査は玉川一郎が担当した。平成１３年から平成１４年の整理調査は川田強が担当した。

５．本書の執筆と編集は川田強が担当した。現地測量及び図版作成は各調査参加者が行い、遺物の写真撮影は川田強が行った。

６．発掘調査等の調査参加者は以下のとおりである。

平成７年度発掘調査　　星義弘　志賀和浩

一般作業　小高町シルバー人材センター委託

平成１３年度整理調査　松本経子　渡部定子

７．調査および報告書作成にあたり玉川一郎氏、吉田陽一氏、佐川久氏にご協力・ご指導を賜った。

凡　　例

1　本書で掲載した挿図の縮尺は各挿図に記してある。

2　遺構等の平面図のトーンによる表現は各図にその内容を記してある。

3　図示した遺物については観察表にその内容を記してある。出土土器観察表の法量は上段：口径、中段：器高、下段：底径であり、（　）表示は復元値である。

4　遺物実測図の表現は次のとおりである。

赤　　彩：塗彩部分

黒色処理：部　　分

須 恵 器：断　　面

5　写真図版の遺物の縮尺は不同である。

6　遺物写真の番号は挿図番号に対応している。

第１章　概　　要

第１節　調査にいたる経緯

東広畑Ｂ遺跡は平成６年１月に表面調査が実施され、発見された遺跡である。同年１月及び２月に町営宅地造成事業に伴う試掘調査が実施された。この調査により、土師器等が多数出土し、平安時代の住居跡が検出されたことから、事前の発掘調査が必要なことが確認された。

協議の結果、町営宅地造成事業に先立って行われる町道工事について、開発計画の変更が困難であるとのことから、平成７年４月２９日～７月９日まで小高町教育委員会が本発掘調査を実施した。

第２節　東広畑Ｂ遺跡と周辺の遺跡

東広畑Ｂ遺跡が所在する相馬郡小高町は福島県浜通り地方のほぼ中央、相馬郡の南端に位置する。小高町の地形は浜通り地方の一般的な地形と同様に双葉断層を境にして西に阿武隈山地、東に相双丘陵及び段丘が樹枝状に分布するものである。このうちの東部分の地形は小高川・宮田川等小河川により形成された沖積地、これらに開折された海成・河成段丘、それを取り巻く丘陵地と大きく区分できる。これらは概ね町の北半部が小高川流域、南半部が宮田川流域にあたり、宮田川河口には井田川浦という比較的大きな潟湖の干拓地があり、小高川河口には前川浦という潟湖が現在も残っている。

丘陵地縁辺に位置する海成・河成段丘は第四紀の堆積物からなり、５つの段丘面が認められる。このうち、第３段丘は小高川両岸に特に発達しており、平坦面が広いことなどから、旧石器時代以降の遺跡が多く確認されている。

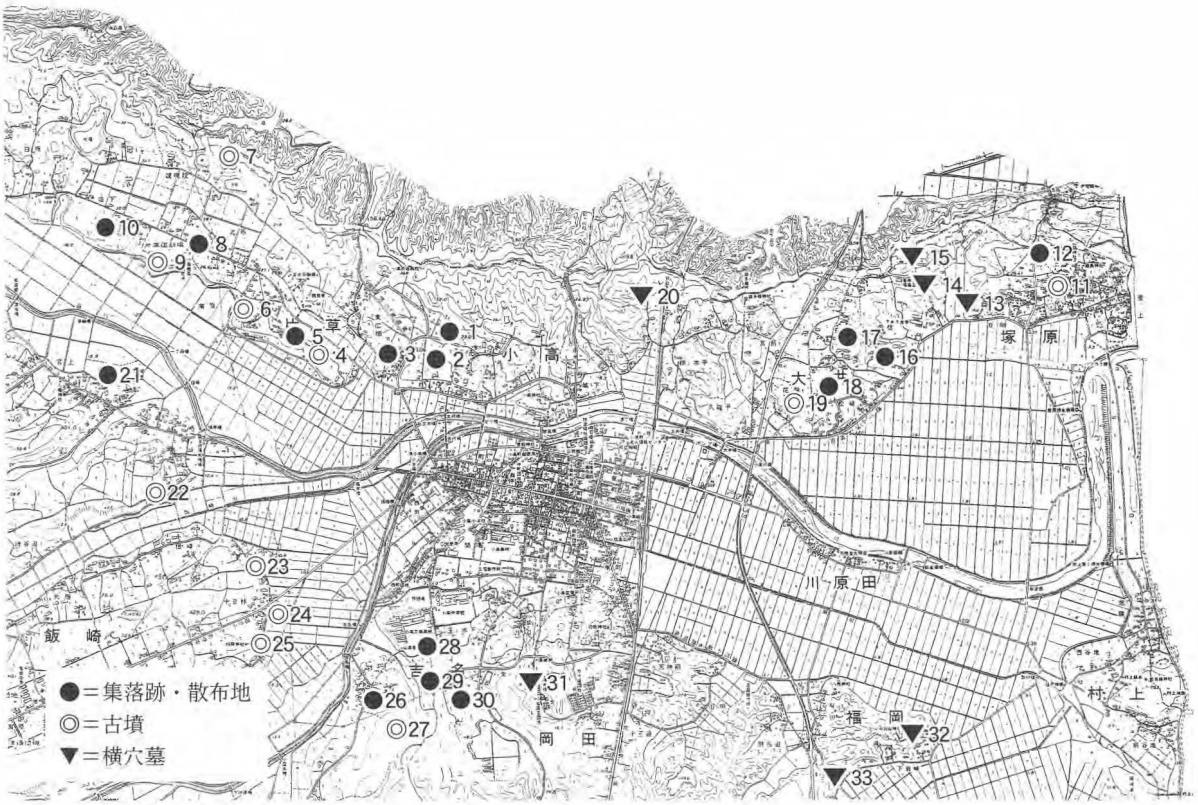


図１　周辺の遺跡（Ｓ＝１／40000）

小高川北岸では、この第３段丘が現海岸線より約７km にわたって沖積地縁辺に存在し、東広畑Ｂ遺跡は現海岸線より約４km 離れたこの第３段丘面に位置する。遺跡周辺の第３段丘は小高川より北上する支谷により開折されており、南方に樹枝状に突き出したような形状を呈している。当遺跡はこの樹枝状段丘の基部に位置し、丘陵を背にして、小高川より北西方向に伸びる支谷に南面した南北約６０ｍ幅の緩斜面上にある。標高は約１５～２２ｍを測り、沖積地との比高差は約８ｍ、丘陵地とは約１５ｍある。当遺跡と支谷を隔てた南西の段丘上には、東広畑Ａ遺跡があり、縄文時代早期以降の遺物が確認されているが、ほぼ当遺跡と同様の内容をもつものと考えられる。

東広畑Ｂ遺跡は弥生時代から平安時代に至る複合遺跡であるが、今回の調査では主に古墳時代～平安時代の遺構・遺物が確認されているので、ここでは当該期の周辺の遺跡を確認しておきたい。

小高川流域は第３段丘を中心に数多くの古墳及び横穴墓が分布している。これらは大きく４つに区分される集中地域を形成している。海岸部の小高川北岸には塚原古墳群（１１）や大井花輪古墳群（１９）が存在し、塚原古墳群からは石製模造品が確認されていることなどから、５世紀代の古墳が存在するものと推察される。

小高川の支流前川北岸の内陸部、片草南原古墳群(９)及び一里段古墳群（６）が位置する段丘は当地域の中で最も濃密な古墳の分布が認められる地区である。平成１２年の一里段古墳群１号墳の調査では６世紀代の所産であることが確認された。

小高川（前川）中流域には十日林古墳（２４）や手子塚古墳（２２）及びこれらの対岸に中村平古墳群（２７）が存在する。また、潟湖である前河浦に注ぐ泉沢川の北岸には下岩崎古墳群（横穴墓群）（３２）、上岩崎古墳群（横穴墓群）（３３）があり、一つの集中域を形成している。

時期は未確定のものが多いが、塚原古墳群及び前方後円墳とされる手子塚古墳・荒神前古墳（4）等は中期以前に形成された可能性があるものの、これらの多くは古墳時代後期の所産と考えられる。

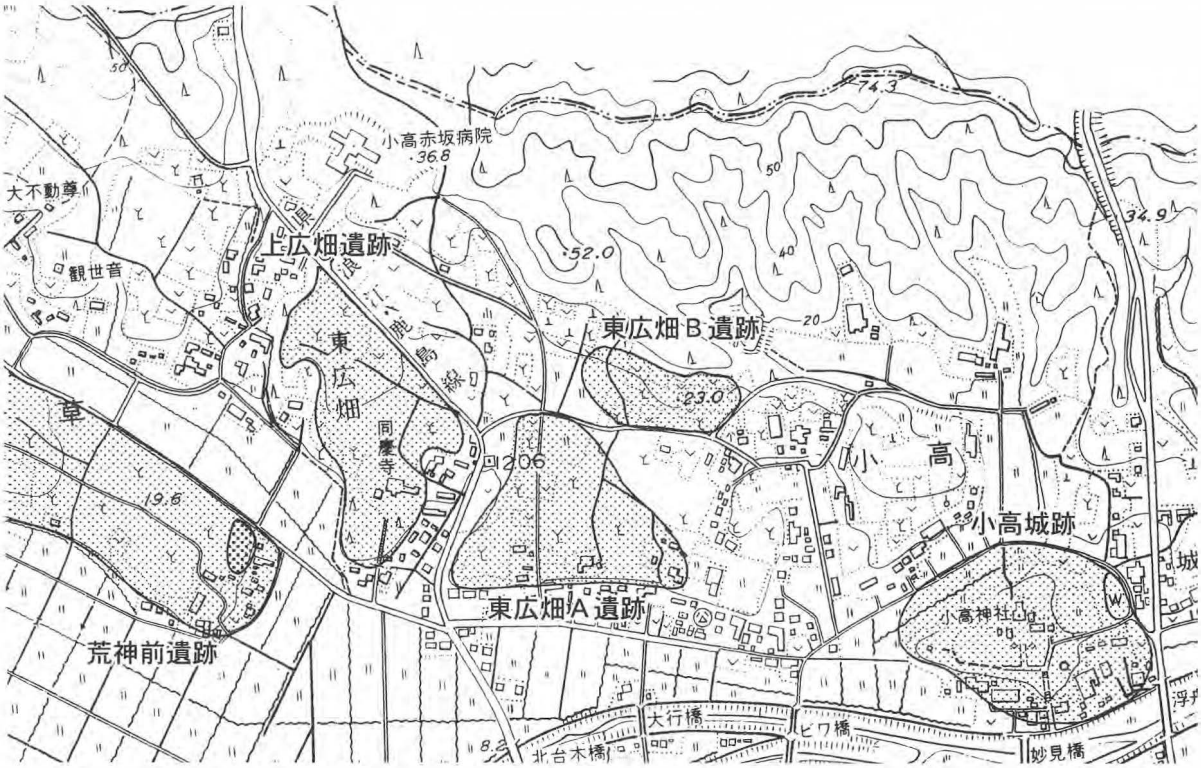


図２　東広畑Ｂ遺跡位置図（Ｓ＝１／ 10000）

表1　東広畑B遺跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代(古墳～平安)
1	東広畑B遺跡	集落跡	古墳前・平安
2	東広畑A遺跡	散布地	古墳前～平安
3	上広畑遺跡	散布地	奈良・平安
4	荒神前古墳	古墳	古墳
5	荒神前遺跡	集落跡・散布地	古墳後期～平安
6	一里段古墳群	古墳	古墳後期
7	行徳古墳群	古墳	古墳
8	片草南原遺跡	集落跡・散布地	古墳後期～平安
9	片草南原古墳群	古墳	古墳
10	北鳩原花輪遺跡	散布地	古墳前期
11	塚原古墳群	古墳	古墳中期～
12	諏訪原遺跡	散布地	古墳後期
13	日向横穴墓群	横穴墓	古墳後期
14	堂林横穴墓群	横穴墓	古墳後期
15	横山古墳群	古墳・横穴墓	古墳
16	清信遺跡	散布地	古墳後期～平安
17	原遺跡	散布地	古墳後期～平安
18	大井花輪遺跡	集落跡・散布地	古墳後期～平安
19	大井花輪古墳群	古墳	古墳
20	岩迫横穴墓群	横穴墓	古墳後期
21	元屋敷遺跡	散布地	古墳後期～平安
22	手子塚古墳	古墳	古墳
23	勧請内古墳	古墳	古墳
24	十日林古墳	古墳	古墳
25	杉平古墳群	古墳	古墳
26	中村平遺跡	集落跡・散布地	古墳後期～平安
27	中村平古墳群	古墳	古墳
28	玉ノ木平A遺跡	散布地	古墳後期～平安
29	玉ノ木平B遺跡	散布地	奈良・平安
30	玉ノ木平C遺跡	散布地	奈良・平安
31	漆原横穴墓群	横穴墓	古墳
32	下岩崎古墳群(横穴墓群)	古墳・横穴墓	古墳
33	上岩崎古墳群(横穴墓群)	古墳・横穴墓	古墳

これらの古墳群の周囲には当該期の多くの散布地があり、これらが立地する段丘面に古墳と共に集落が存在するものと予測される。当地域は古墳時代に至り、小高川（前川）北岸域を中心に継続的に集落が形成され、古墳時代後期の群集墳及び横穴墓群の出現をみるものと推定される。

小高川流域の表面調査で最も遺物が出土するのは8世紀中葉以降9世紀代を中心とした時期のものである。この傾向は小高川中下流域だけではなく、上流域および宮田川流域等でも確認できる。これらのうち調査されたものの多くは、鉄滓や羽口及び木炭を焼成したと考えられる土坑等が確認され、鍛冶関連遺跡と意義付けることができる。この時期は原町市の金沢製鉄遺跡群等大規模製鉄所の操業が最盛期を迎えているときであり、当地区の遺跡数の増加もこれと関連している可能性がある。

また、「和名抄」に記載される古代行方郡の「吉名郷」は、現在も中村平古墳群周辺に「吉名」という地名が残ることから、この地区周辺に比定されている。このことから奈良・平安時代には、この小高川流域が行方郡内の一つの核となる地域であったことが伺い知れ、古墳時代以降の濃密な遺跡分布状況もそれを裏付けていると言えるだろう。

第３節　調査の概要

平成６年に先立って行われた町営宅地造成事業に伴う試掘調査で、古墳時代以降の遺物及び平安時代の遺構が確認されている。トレンチは図４に示すとおりである。主に８・１０・１７・１９Ｔで遺物が多く出土し、７～１０・１３～１９Ｔを中心に要保存対象地区が設定されている。また、２０～２３Ｔは個人住宅建設に伴う試掘調査であり、平成１１年に実施したものであるが、遺構は確認されていない。

平成７年の本発掘調査は図３・４に示す第１地点、第２地点の２地点で実施されている。調査面積は第１地点が７２㎡、第２地点が１００㎡である。第１地点の調査は平成７年４月２９日～５月２７日まで、第２地点の調査は平成７年６月１日～７月９日まで実施された。

第１地点は平安時代の住居跡２軒、土坑２基、時期不明の溝が１条確認されている。第２地点は古墳時代前期の住居跡１軒の他、時期不明の溝１条、土坑５基、性格不明遺構１基検出された。

調査はいずれの地点も表土を重機で掘削し、実施された。表土下数十 ㎝ で確認面であるシルト質のローム面が認められる。第１地点は現道により既に南側が掘削された状況で調査がなされている。

図３　東広畑Ｂ遺跡位置図（Ｓ＝１／３000）

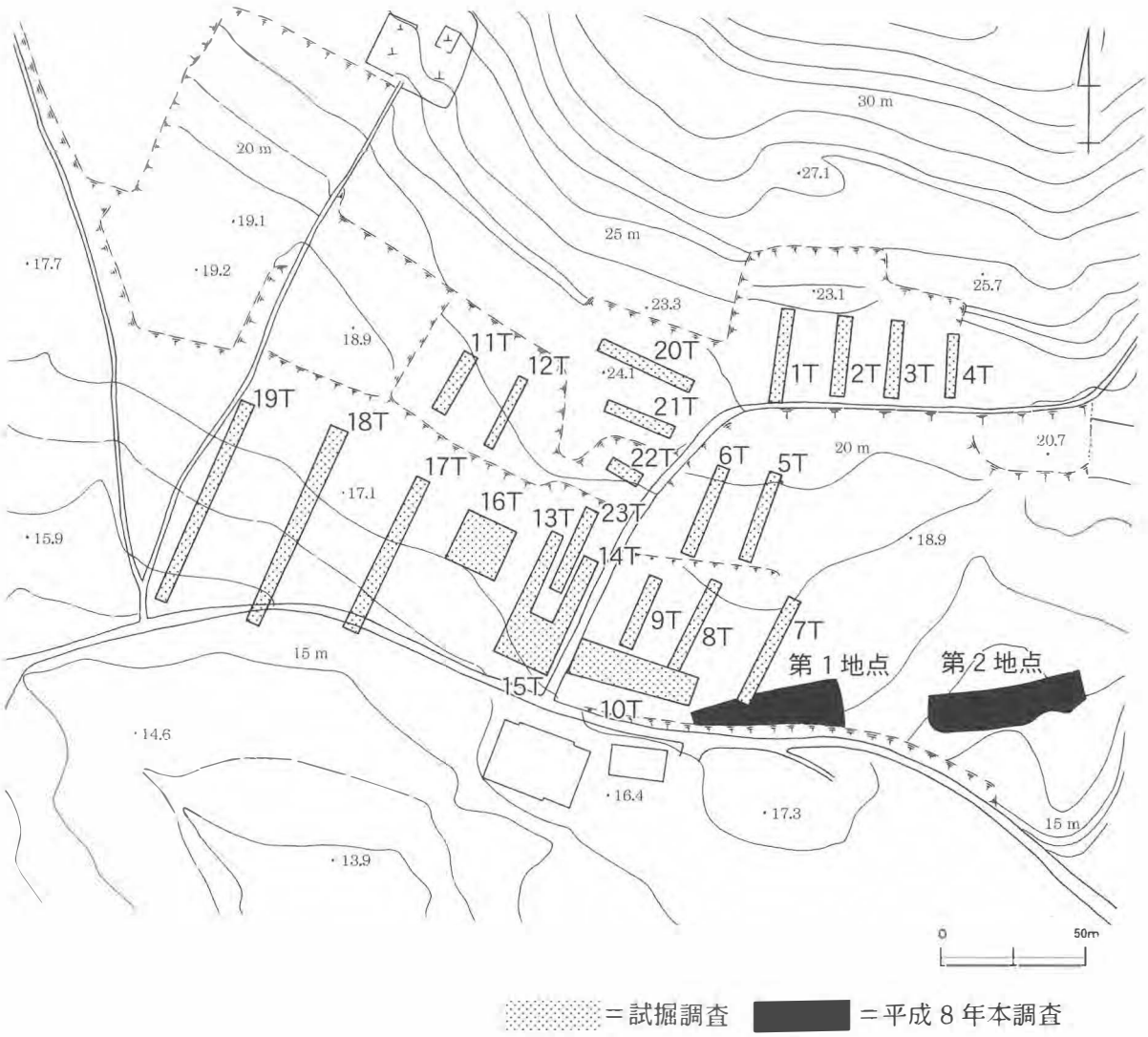


図４　東広畑Ｂ遺跡調査状況図（Ｓ＝１／1000）

第2章　遺構と遺物

第１節　第１地点

１　ＳＩ０１(図６)

最大幅　3.7ｍ　**形態**　方形　**確認面よりの深さ**　約４０㎝　**主軸**　Ｎ－３２°－Ｅ　**検出状況**　南側半分を現道によって削平されている。ＳＤ０１によって切られる。　**覆土**　暗灰褐色シルトを基調とする。　**小穴**　（Ｐ１－２０㎝　Ｐ２－１５㎝　Ｐ３－２０㎝）柱穴は明確ではなかった。　**カマド**　北壁で確認された。ローム質の暗黄褐色シルトで袖部を構築する。火床面から煙道部にかけて被

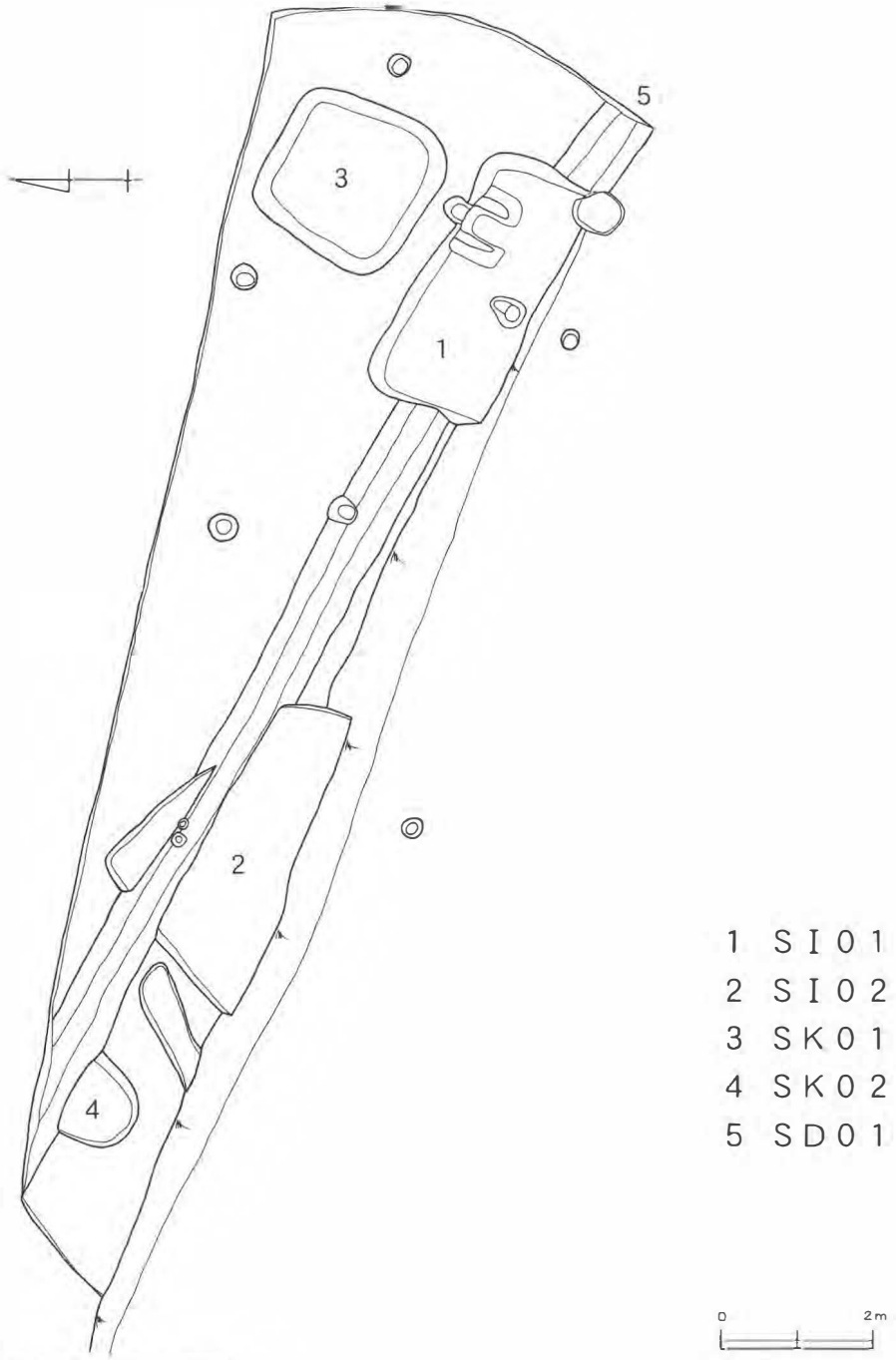
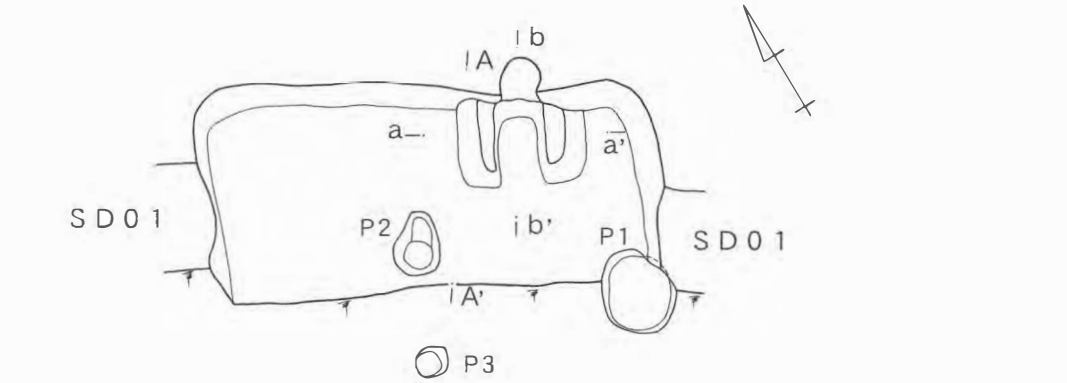
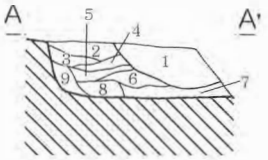


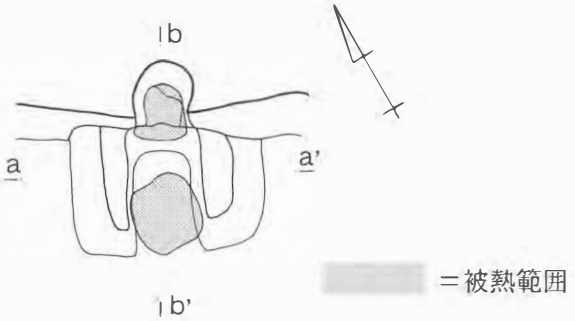
図５　第１地点全体図（Ｓ＝１／100）

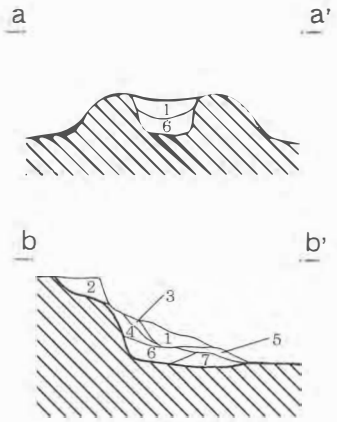




1　暗灰褐色土（ＳＤ01覆土）
2　暗灰褐色シルト
3　灰褐色シルト
4　暗灰褐色シルト（ローム粒を含む。）
5　暗黄褐色シルト（ロームブロック主体。）
6　暗灰褐色シルト（ローム粒を含む。）
7　灰暗褐色シルト（ロームブロックを含む。）
8　暗黄褐色シルト（ローム粒と褐色シルトの混合。）
9　暗黄褐色シルト（ローム粒・ロームブロック主体。）

ＥＬ＝18.60 m　0　2m





1　暗黄褐色シルト（やや粘質あり。）
2　暗灰褐色シルト（煙道覆土。）
3　暗赤褐色土（焼土。）
4　暗赤褐色土（焼土。ローム粒含む。）
5　暗黄褐色シルト
6　黄褐色シルト（焼土を多く含む。）
7　暗褐色シルト（焼土ブロック、炭化物多量に含む。）

ＥＬ＝18.70 m　0　1m

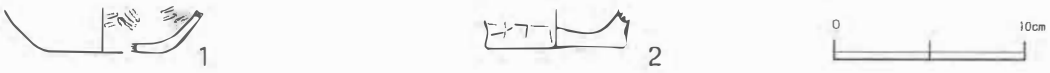
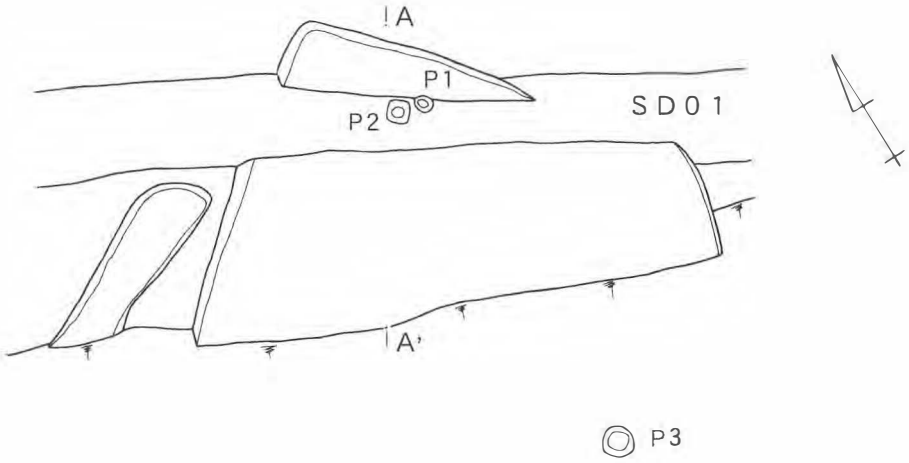
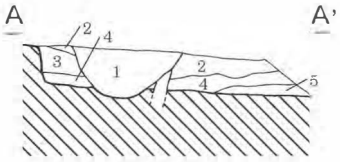


図６　ＳＩ０１平面図・出土遺物（Ｓ＝１／60・１／40・１／４）



1 暗灰褐色土（焼土、炭化物含む、ＳＤ０１）
2 暗灰褐色シルト（焼土、炭化物多量に含む。）
3 灰褐色シルト（ローム粒・ロームブロック多量に含む。）
4 灰褐色シルト（ローム粒多量に含む。）
5 灰褐色シルト（ローム粒含む。）



ＥＬ＝18.50 m

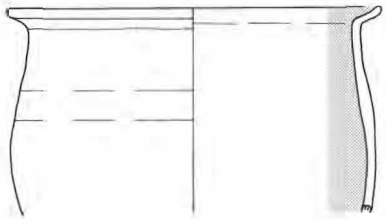


図７　ＳＩ０２平面図・出土遺物（Ｓ＝１／60・１／4）

熱部が認められる。 **遺物**　実測可能なものは少なかった。１はロクロ整形底部回転ヘラ削りの杯、２が甕の底部である。その他、実測できなかったが煙道部よりロクロ整形の内黒杯の破片が出土している。また覆土中より、鉄滓が少量出土している。 **時期**　出土土器より９世紀代の所産であることは確実であり、９世紀前半段階に位置付けられる可能性が高い。

２　ＳＩ０２(図７)

最大幅　推定3.8ｍ　**形態**　不整方形　**確認面よりの深さ**　約３０㎝　**主軸**　Ｎ－４４°－Ｅ　**検出状況**　南側半分を現道によって削平されている。ＳＤ０１に切られる。 **覆土**　暗灰褐色シルトを基調とし、炭化物、焼土が全体的に認められる。 **小穴**　柱穴は認められなかった。 **カマド**　確認できなかったが、覆土の特徴から、ＳＤ０１に壊された可能性がある。 **遺物**　１はロクロ整形の甕で内面は黒色処理され、口縁端が垂直に立ち上がる形態のものである。本遺構出土破片とＳＫ０２出土破片とが遺構間接合したものである。２は須恵器の甕である。３は小型甕の底部、４は内黒の甕の底部である。５～１０はすべて内黒杯の底部で、体部下位～底部にかけてヘラ削りが施される。底部径は5.0～7.2を測る。 **時期**　出土土器より９世紀代の所産と考えられ、遺構間接合したＳＫ０２出土土器とあわせ、その前半段階に位置付けられる。

３　ＳＫ０１(図８)

規模　2.2×2.2ｍ　**形態**　方形　**確認面よりの深さ**　約２０㎝　**主軸**　Ｎ－３５°－Ｅ　**検出状況**　ＳＩ０１のカマド主軸の延長線上に位置することから、ＳＩ０１と関連する遺構の可能性がある。また、両脇に位置する小穴は深さ約３０㎝あり、等間隔に配置されていることから、この土坑と一連の遺構であると考えられる。 **覆土**　暗灰褐色シルトを基調とする。 **遺物**　１は非内黒で、焼成の悪い杯である。やや内湾気味に立ち上がる形態をしており、椀形に近い。体部下位～底部外周に回転ヘラ削り、底部中央は糸切り痕が認められる。２は体部下位～底部にかけて回転ヘラ削りが施される内黒杯である。 **時期**　出土土器から９世紀代の所産と考えられる。

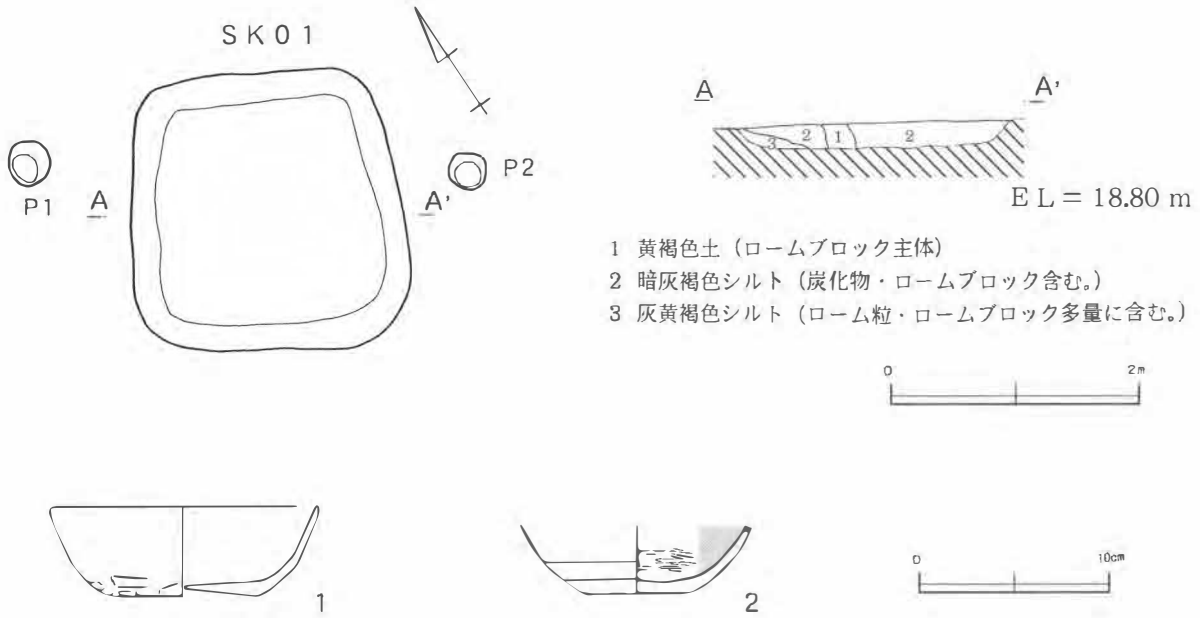


図８　ＳＫ０１平面図・出土遺物（Ｓ＝１／60・１／４）

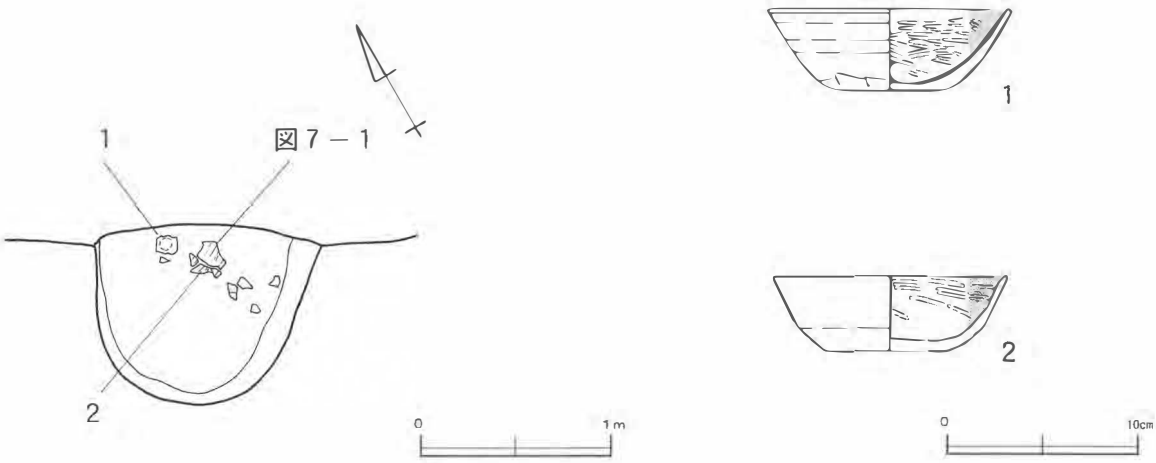


図９　ＳＫ０２平面 図・出土遺物（Ｓ＝１／40・１／４）

４　ＳＫ０２（ 図９）

最大径　1.1ｍ　**形態**　不整円形　**確認面 よりの深さ**　約１０㎝　**検出状況**　ＳＤ０１に切られる。 **遺物**　一括して半完形の土師器が出土した。図７－１の甕は本遺構出土破片とＳＩ０２出土破片が遺構間接合したものである。１・２は内黒で、体部下位～底部に回転ヘラ削りが施されるロクロ整形の杯である。口縁がわずかに外反する特徴があり、底径は6.1～6.2、底径口径比は0.5以下を測る。 **時期**　遺構間接合したＳＩ０１出土土器とあわせ、９世紀前半の所産と考えられる。

５　ＳＤ０１（ 図５）

最大幅　約0.8ｍ　**最大長**　１５ｍ以上　**断面 形態**　Ｕ字形　**確認面 よりの深さ**　約４０㎝　**検出状況**　ＳＩ０１・０２、ＳＫ０２を切る。 **覆土**　暗灰褐色シルトを基調とする。 **遺物**　土師器・須恵器が出土したが、実測可能なものは認められなかった。これらは重複する遺構からの流れ込みと考えられる。 **時期**　９世紀代の遺構を切っているが、それ以降の出土土器がなく、不明である。

第２節 第２地点

１　ＳＩ０３（ 図11）

長軸　3.5ｍ　**短軸**　3.4ｍ　**形態**　小判形　**確認面 よりの深さ**　約２０㎝　**主軸**　Ｎ－3°－Ｅ　**小穴**　明確に主柱穴と言えるものは確認されていない。（Ｐ１－１０㎝　Ｐ２－１８㎝　Ｐ３－１６㎝　Ｐ４－１５㎝　Ｐ５－２４㎝　Ｐ６－１９㎝　Ｐ７－１９㎝　Ｐ８－１４㎝　Ｐ９－１９㎝　Ｐ１０－１５㎝　Ｐ１１－２１㎝　Ｐ１２－１２㎝）　**炉**　確認できなかった。 **遺物**　図示した遺物はすべて床面直上の土器である。比較的多数の土器が出土した。１は内外面赤彩される有段口縁の壷である。口唇は内傾するように面取りされ、外面上端はわずかに外反する。有段部下端は粘土紐を貼り付け、下方にやや突出した段部を形成している。口縁外面は横ナデが施され、明確ではないが横方向ミガキが施されている可能性がある。頸部内外面はハケ目後ミガキが認められる。２は壷の底部である。底部外周に粘土紐を貼り付けており、中央がくぼむ形状を呈す。３は外面にミガキが施されることから広口壷とした。体部中位が張り出した形態で、口縁は内外面とも「くの字状」に外反している。口唇は横ナデにより横方向につまみだされ、断面形態は丸素縁化している。外面はヘラ削り後ミガキ、内面はヘラ削り後ナデが施されており、内面には指頭押捺が一部認められる。口縁内面には焼成後の擦痕

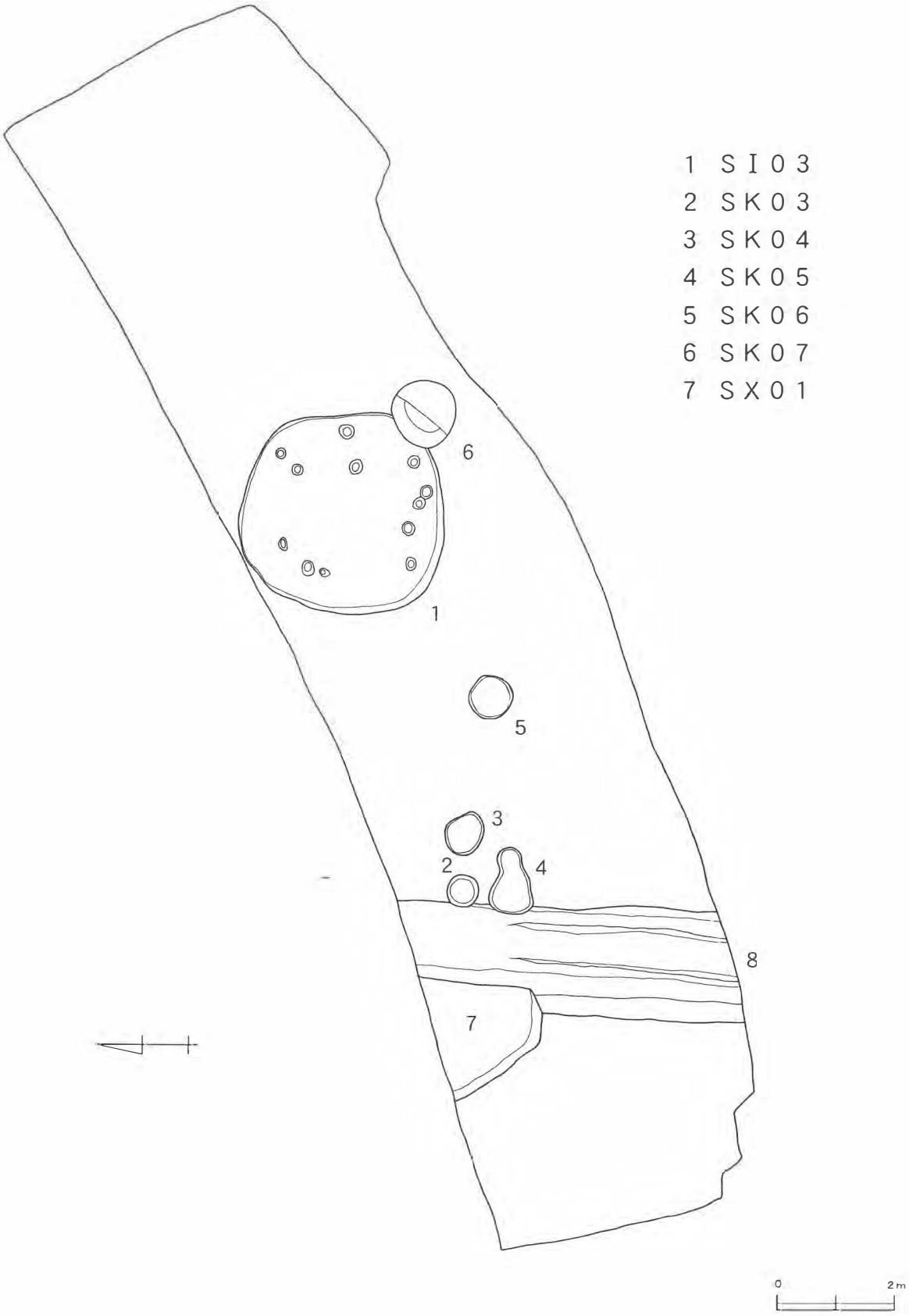


図 10　第２地点　全体図（Ｓ＝１／100）

があり、転用された可能性がある。４はハケメ調整の甕である。口縁が「くの字」に外反し、胴部の張り出しはやや弱い。体部下位はヘラ削りが認められる。残存している口縁端は輪積部である。５は台付甕の脚部でヘラ削りが施されている。 **時期**　出土土器は塩釜式に相当し、古墳時代前期の所産と考えられる。

２　ＳＫ０３～ＳＫ０７(図１０)

ＳＫ０３～ＳＫ０７からは少量の弥生土器・土師器が出土しているが、図示できるものは無かった。これらの時期及び性格は不明である。ＳＫ０７はＳＩ０１を切っている。

３　ＳＤ０２(図１０)

ＳＤ０２からは遺物が出土しなかった。ＳＸ０１を切っている。時期及び性格は不明である。

４　ＳＸ０１(図１０)

ＳＸ０１からは少量の弥生土器・土師器が出土したが、図示できるものは無かった。ＳＤ０２に切られる。時期及び性格は不明である。

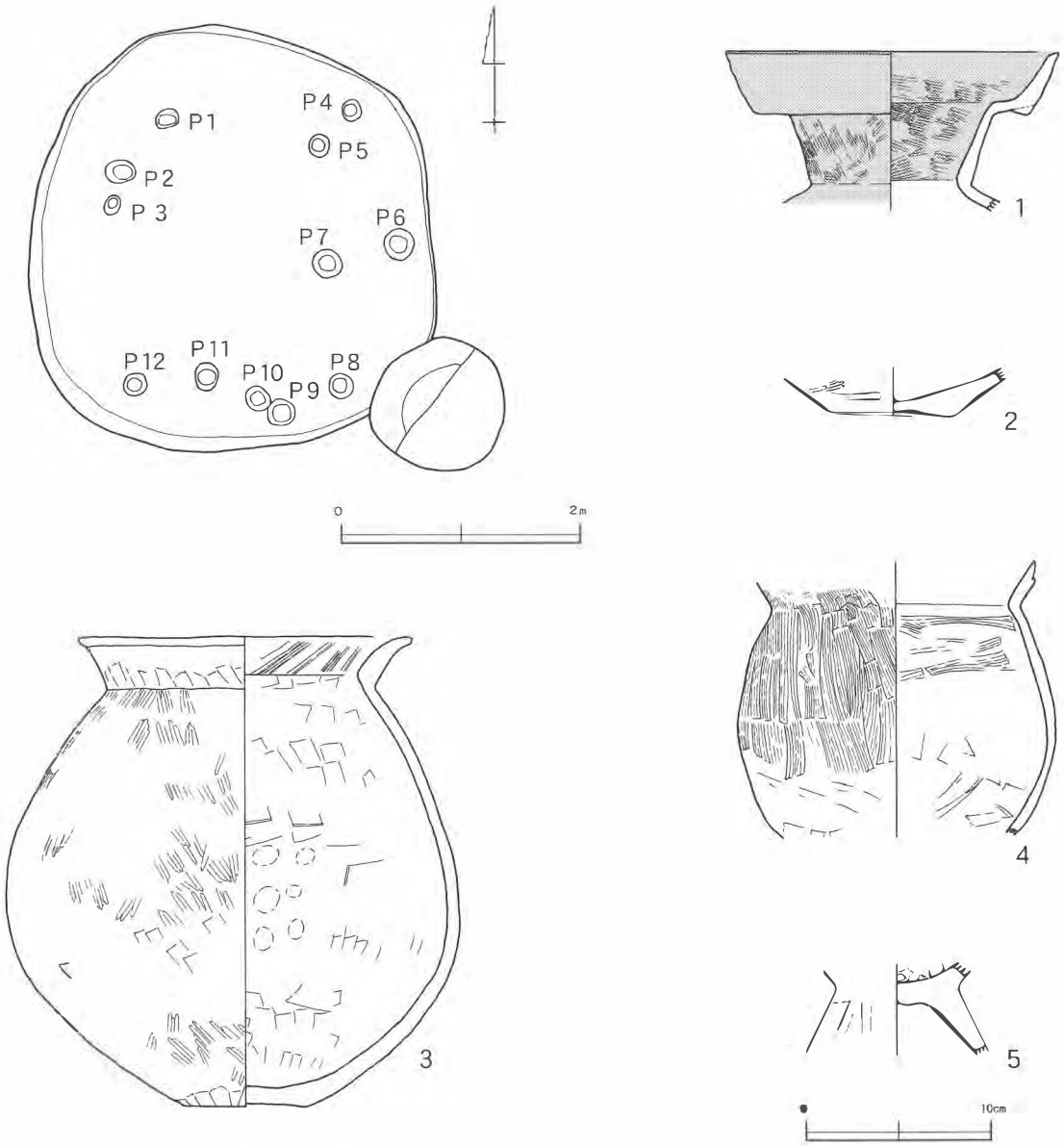


図11　ＳＩ０３平面図・出土遺物（Ｓ＝１／60・１／４）

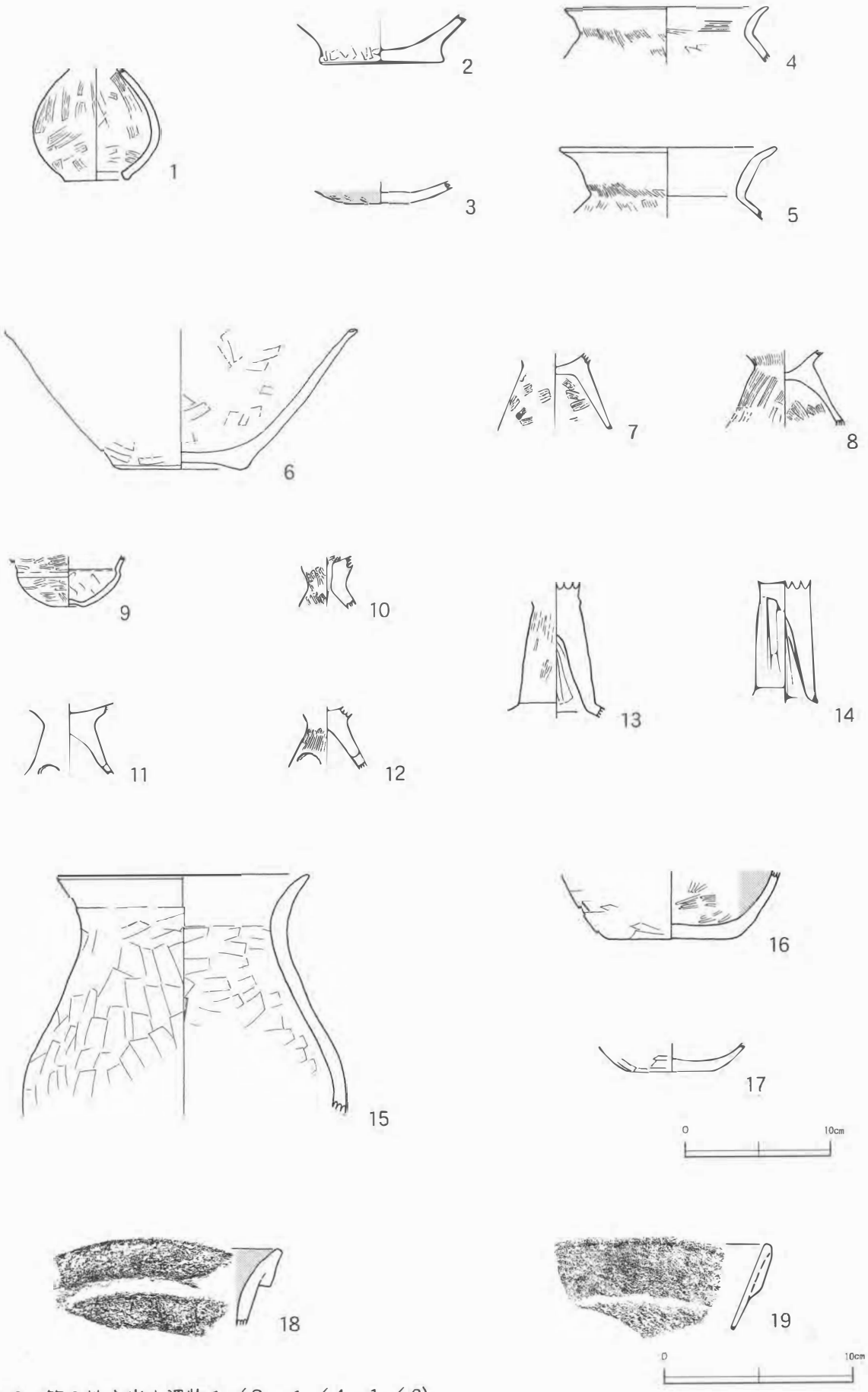


図 12　第２地点出土遺物１（Ｓ＝１／４・１／３）

５　第２地点出土土器（古墳～平安）（図１２）

第２地点で遺構外から出土した古墳時代以降の土器を図１２にまとめた。１～１４、１８、１９が塩釜式相当の古墳時代前期のもの、１５～１７が奈良時代以降のものである。

１は底部穿孔の小形壷である。外面に粗いヘラ削りが認められる。２・３は壷の底部である。４・５は甕で「くの字」に屈曲し、外反する口縁をもち、横ナデが施され、丸素縁化している。体部はハケ目調整である。６は大形壷の体部下半部である。わずかに外面に赤彩の痕跡が認められる。残存部の上端は擬似口縁であり、上方からの刻みが施されている。７・８は台付甕の脚部であり、ハケ目調整が認められる。９は小形の鉢である。外面は丁寧なミガキが施され、体部中位に屈曲部をもち口縁は外反するものと考えられる。底部は上げ底の形態を呈す。１０は小形器台である。器受部から脚へ穿孔が認められる。１１・１２は高杯あるいは器台の脚部である。「八の字」状に広がる形態を呈すと考えられる。いずれも、脚部に透孔をもつ。１３・１４は高杯の脚部である。いずれも柱状中空で裾部が屈曲する形態を呈するものと考えられる。１３はミガキ調整が認められるが、１４では確認できず簡略化が指摘できる。１８・１９は複合口縁の壷である。１８は明瞭な段をもち、口縁横ナデ、頸部ハケ目、内面赤彩が認められる。１９はやや不明瞭な複合部をもち、口縁はハケメ調整の痕跡が認められる。

１５はヘラ削り調整の甕である。胴部がやや下膨れ気味の形態を呈す。８世紀代の所産と考えられる。１６は内黒杯で体部下半～底部に回転ヘラ削りが施されている。１７はいわゆる酸化炎焼成の土師質土器である。底部は糸切り未調整であるが、体部下半に粗いヘラ削りが施されている。

この他、遺構外から少量の鉄滓と羽口片が出土している。

第３節　その他の出土遺物

第１・２地点調査で遺構が検出されていない弥生時代以前の遺物と試掘調査時の資料等をこの節でまとめておく。

１　石器（図１３）

１～３は第２地点で遺構外から出土したものである。１は緑泥片岩製の打製石鍬とされるものである。側片両側に抉りを形成し、刃部は薄利面が少なく、素材面を利用しているものである。２は打製石斧（石鍬）あるいは扁平片刃石斧と考えられる。粘板岩製である。３は太形蛤刃石斧である。側縁に明瞭な敲打痕が認められることから叩石に転用されたものと考えられる。

第１・２地点で縄文時代の遺物がほとんど検出されておらず、桜井式が比較的多く出土していることから、これらは弥生時代中期後半に伴うものと推定される。

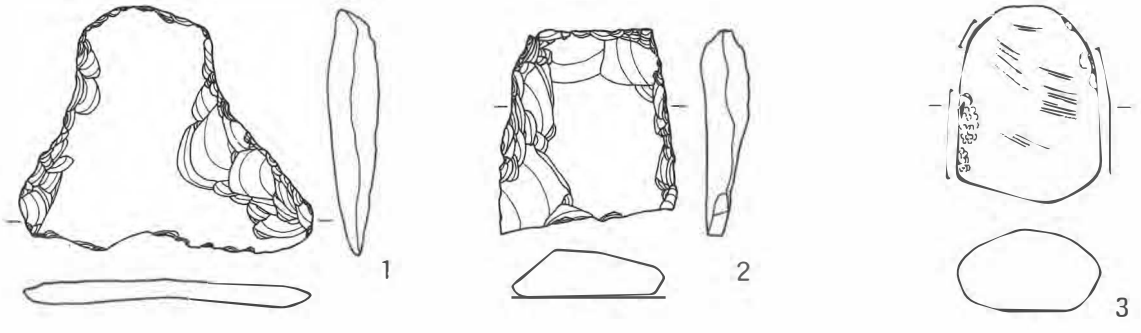


図13　第２地点出土遺物２（Ｓ＝１／３）

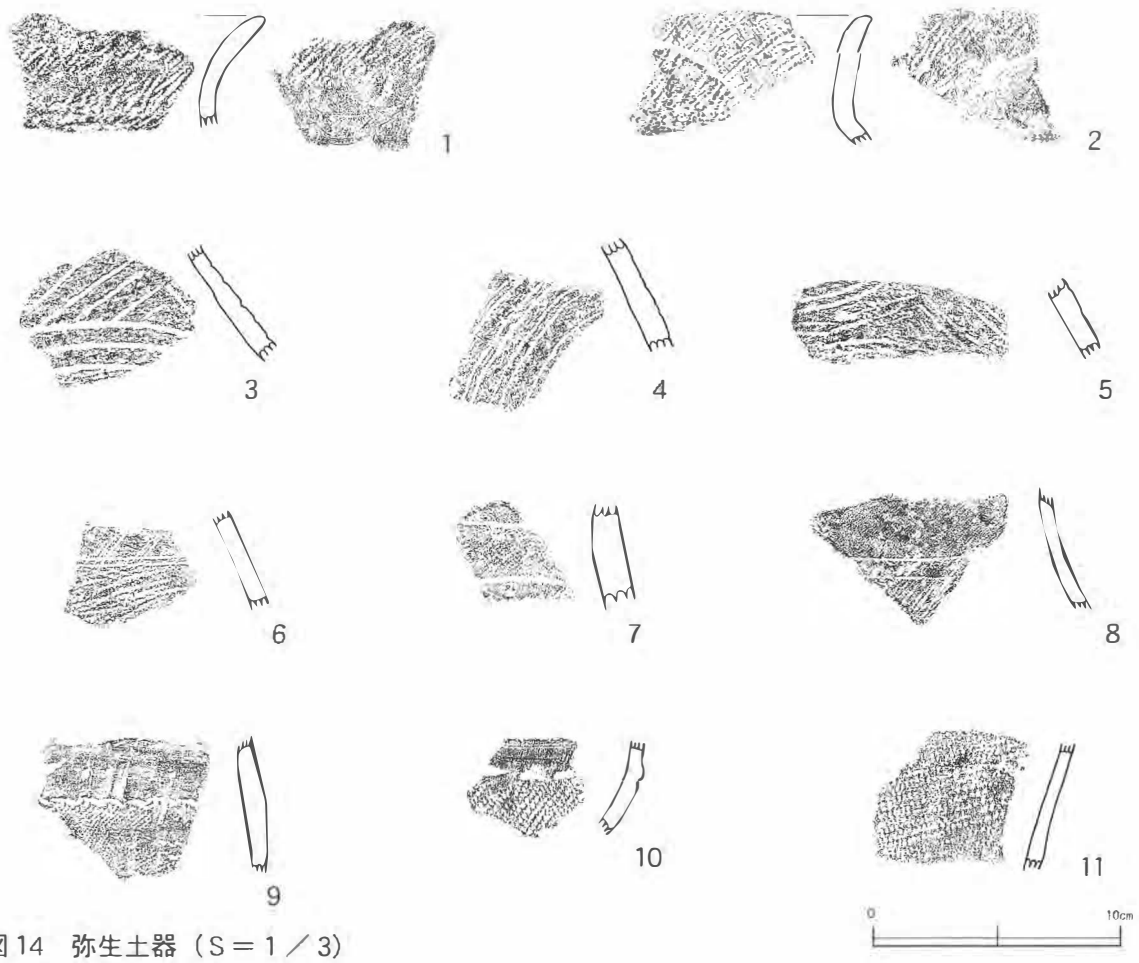


図14　弥生土器（Ｓ＝１／３）

２　弥生土器（図１４）

１～１１は第１・２地点から出土した弥生土器である。１・２は緩やかに短く外反する形態を呈す壷の口縁で、口縁内外面に縄文が施文される。３～６は平行沈線で重三角文等を描く桜井式の壷である。線間は３㎜ 以上を測る。７・８は枡形囲・南御山Ⅱ式に相当する磨消縄文が施されるものである。ヘラ描沈線で区画されている。９は甕の体部で頸部に結節文区画が認められる。頸部の屈曲はやや弱く、緩やかなものと考えられる。１０は頸部を列点文で区画する甕である。枡形囲式に相当するものと考えられる。その他少量の縄文を施文する破片があるが図示できなかった。これらの多くは桜井式を中心とし、少量の枡形囲・南御山Ⅱ式が含まれるものと考えられる。

３　試掘調査出土遺物（図１５）

第１・２地点の調査に先立って行われた表面調査及び試掘調査出土資料を図１５にまとめた。このうち１、２、４、５、９が１７Ｔから、６が１９Ｔから出土したものである。１・２は内黒杯で、体部下位～底部をヘラ削り調整している。２は一部糸切り痕を残す。３も内黒杯であるが、口縁がわずかに外反し、底部は糸切り未調整である。これらはいずれも底径口径比０.５以下である。４は底部外周ヘラ削りの内黒杯である。やや椀杯に近く直立したような立ち上がりを示す形態である。これらは概ね９世紀代に位置付けられる。６は「ハの字」状に開く脚部を持つ高台杯で内面黒色処理が認められる。１０世紀前半頃の所産と考えられる。７は須恵器の大甕である。８は土師器甕でヘラ削り調整である。

他に多数の土師器片等が出土したが、図示することができなかったが、ここに図示する遺物と同じく８世紀中葉から１０世紀までのものが主体であり、中でも９世紀代の遺物が多い。

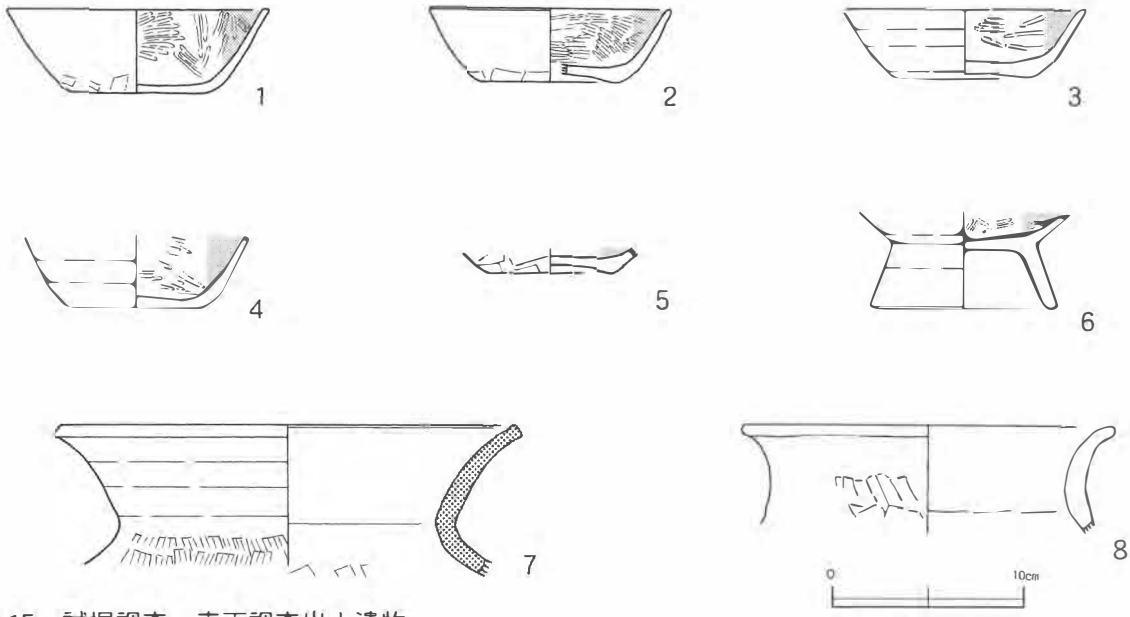


図15　試掘調査・表面調査出土遺物

4　寄贈資料（図１６）

図１６は昭和５８年に小高字東広畑で表採され、小高町教育委員会に寄贈された資料である。本資料が採集された詳細な場所は不明であるが、当遺跡及び東広畑Ａ遺跡に伴うものと考えられる。

１は口縁が「くの字」に屈曲する甕で、外面はヘラ削りの他、一部ミガキが認められる。球胴及び長胴化が認められない形態であることから、古墳時代中期の所産と考えられる。今回の調査ではこの時期の資料は得られていないが、当遺跡及び東広畑Ａ遺跡に５世紀代の遺構が存在することを予測させる資料である。

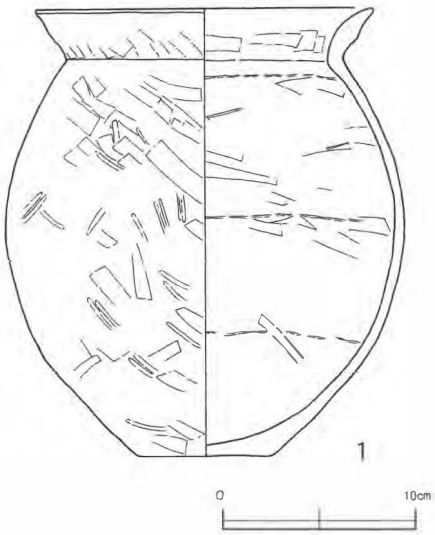


図16　寄贈資料（Ｓ＝１／４）

第3章　ま　と　め

ここで、今回の東広畑Ｂ遺跡調査の概略を時代別に記し、本報告のまとめとしたい。

今回の調査区からは、縄文時代の遺物・遺構は確認されなかった。隣接して縄文時代前期の片草貝塚が存在するが、当表採資料の中にも縄文時代の資料はほとんどなく、縄文時代の遺構は当遺跡の範囲では主体的に分布していないものと考えられる。

弥生時代としては、少量の土器が出土したが、遺構は確認されなかった。出土土器は、桜井式を中心としているが、一段階古い枡形囲式・南御山Ⅱ式も弱冠含まれている。現在のところ、弥生時代中期後半の遺構は、当遺跡だけでなく小高川流域では確認されていないが、当該期の土器が近隣の荒神前遺跡や中村平遺跡でも出土しており、前後の段階に比べ、小高川中流域の広い範囲で生活の痕跡が認められることから、今後の調査の進展によって遺構が確認されることが予測される。

古墳時代に該当するものとして、塩釜式の土器を伴う住居跡が１軒検出された。当該期の遺構は小高町内では初めての検出である。伴う遺物は多くはないが、有段部が外反せず直線的な形態の特徴的な壷（図１１－１）が出土している。他にハケメ調整の甕、台付甕、広口壷などがある。また、遺構外出土の資料には柱状中空で裾部に屈曲をもつ高杯（図１２-１３、１４）などがみられる。これらの出土土器は新地町山中遺跡出土土器（福島県教育委員会ほか 1990）や浪江町本屋敷古墳群１号墳・２号墳出土土器（法政大学考古学研究室 1985）と共通する部分があり、細分は難しいが、仙台平野を中心とした辻秀人氏の編年（辻 1995）によれば、Ⅲ期に相当する資料と言え、前期後半の資料と位置付けられる。当地方では資料数の少ない時期であり、貴重な資料といえるだろう。

また、当遺跡周辺の表採資料として５世紀代の遺物も確認されている。第１章で記したように小高川北岸の段丘面は古墳や横穴墓が多く分布し、古墳時代の遺跡の集中域である。当遺跡はこの一角を担う古墳時代前期以降の集落であるとすることができよう。そして、今回、前期段階の遺構が確認されたことは、当地方の古墳時代を考える上で重要な成果といえるだろう。

奈良・平安時代の土器は主に８世紀中葉～１０世紀前半までの資料が確認されている。遺構としては住居跡が２軒、土坑が２基検出されている。これらは概ね９世紀の前半段階に位置付けられ、試掘調査等においても、この時期の遺物が最も顕著であり、当遺跡の中心となる時期と考えられる。また、わずかではあるが、鉄滓や羽口が出土していることから、鍛冶関連遺跡としての性格を当遺跡に付け加えることもできるだろう。

今回の調査はわずかな面積であるが、東広畑Ｂ遺跡唯一の発掘調査であり、その概要を把握することができた。当遺跡が位置する小高川北岸域は多数の遺跡が確認されているが、大規模な発掘調査はこれまで実施されておらず、未調査のものがほとんどであり、不明な点が多い。そのような状況の中で今回の調査成果は貴重なものといえ、これらの遺跡の内容を推察する一助になるものと言えよう。

参考文献

小高町　1975　「小高町史」

小高町教育委員会　2001　「小高町内埋蔵文化財調査報告Ⅰ」

小高町教育委員会　2001　「角部内南台遺跡」

佐久間正明　2000　「福島県における５世紀代の土器変遷－様式的側面を中心に－」『法政考古学第26集』

竹島国基編　1983　「天神沢」竹島コレクション考古図録第１集

竹島国基編　1992　「桜井」竹島コレクション考古図録第３集

玉川一郎　1998　「第１章　近世以前の大字小高」『大字小高史』福島県相馬郡小高町大字小高史編纂委員会

辻秀人　1995　「東北南部における古墳出現期の土器編年－その２－」『東北学院大学論集 歴史学・地理学第27号』

福島県教育委員会　1991・1994・1995・1996・1998・1999　「請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ」

福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　地域振興整備財団　1990　「第１編　山中遺跡」『相馬地域開発関連遺跡調査報告Ⅱ』

福島県教育委員会　㈶福島県文化センター　㈱東北電力　1995「原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅴ・Ⅵ」

福島県教育委員会　㈶福島県文化センター 1986・1988「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅱ・Ⅳ」

法政大学考古学研究室　1985　「本屋敷古墳群の研究」

安田稔　1990　「考察編　第２章 古墳時代」『相馬地域開発関連遺跡調査報告Ⅱ』

出土遺物観察表

表２　出土土器観察表（土師器・須恵器）

挿図番号	器種	法量(cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
6－1	土師器 杯	— — (6.4)	外面体部回転ナデ、底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	密 小石・白色針状物質	外 にぶい黄白色 内 黒色	SI01
6－2	土師器 甕	— — (7.2)	外面ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。	やや粗 砂粒・小石	にぶい橙褐色	SI01
7－1	土師器 甕	(20.0) — —	内外面回転ナデ。内面黒色処理。	密 小石・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SI02 SK02
7－2	須恵器 甕	— — (14.0)	体部回転ナデ。体部下端・底部ヘラ削り。内面ナデ。	緻密 小石	灰白色	SI02
7－3	土師器 甕	— — 5.2	外面体部回転ナデ、底面ヘラ削り。内面ナデ。	やや粗 砂粒・小石・白色針状物質	赤褐色	SI02
7－4	土師器 甕	— — (8.4)	外面ヘラ削り。内面ナデ、黒色処理。底部ヘラ削り。	密 砂粒・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SI02
7－5	土師器 杯	— — (5.0)	外面体部上位回転ナデ、下位ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 小石・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SI02
7－6	土師器 杯	— — (7.0)	外面体部上位回転ナデ、下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SI02
7－7	土師器 杯	— — (7.2)	外面体部上位ナデ、下位ヘラ削り。底部ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	密 小石・白色針状物質	外 にぶい灰褐色 内 黒色	SI02
7－8	土師器 杯	— — 6.4	外面体部上位回転ナデ、下位ヘラ削り。底部ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 小石・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SI02
7－9	土師器 杯	— — (5.9)	外面体部上位回転ナデ、下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	SI02
7－10	土師器 杯	— — (5.8)	外面体部上位回転ナデ、下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 にぶい赤褐色 内 黒色	SI02
8－1	土師器 杯	(14.6) 4.7 (7.8)	外面体部上位回転ナデ、体部下位回転ヘラ削り。底部糸切り後外周回転ヘラ削り。内面回転ナデ。	やや粗 小石・白色針状物質	外 褐色 内 にぶい灰褐色	SK01
8－2	土師器 杯	— — 5.6	外面上位回転ナデ、下位・底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	SK01
9－1	土師器 杯	(12.8) 4.3 6.1	外面上位回転ナデ、下位・底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SK02
9－2	土師器 杯	(12.4) 4.0 6.2	外面上位回転ナデ、下位・底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SK02
11－1	土師器 壷	18.4 — —	口縁外面横ナデ、赤彩。外面頸部～体部、内面口縁部～頸部ハケ目後ミガキ、赤彩。内面体部ナデ。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 赤褐色 内 胴部にぶい褐色	SI03

挿図番号	器種	法量(cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
11−2	土師器 壷	— — 6.9	外面ヘラ削り後ミガキ。内面ナデ。	密 砂粒・小石	にぶい黄褐色	SI03
11−3	土師器 広口壷	(18.4) 25.7 6.6	内外面口縁ヘラ削り後横ナデ。外面頸部〜体部ヘラ削り後ミガキ、底部ナデ。内面頸部〜底部ヘラ削り、指ナデ。	密 砂粒・白色針状物質	黒灰色	SI03
11−4	土師器 甕	— — —	外面ハケ目。内面体部上位ハケ目後ナデ、体部下位ヘラ削り後ナデ。	密 砂粒・白色針状物質	暗褐色	SI03
11−5	土師器 台付甕	— — —	内外面ヘラ削り後ナデ。	緻密 砂粒・小石・白色針状物質	橙褐色	SI03
12−1	土師器 壷	— — (4.2)	底部穿孔。外面ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。	密 砂粒・小石	にぶい暗褐色	第2地点
12−2	土師器 壷？	— — 8.8	外面ハケ目後ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	密 砂粒・褐色粒・白色針状物質	にぶい褐色	第2地点
12−3	土師器 壷？	— — 4.6	外面ミガキ、赤彩。底部ナデ、赤彩。内面ナデ。	密 砂粒・白色針状物質	にぶい褐色	第2地点
12−4	土師器 甕	14.4 — —	外面口縁横ナデ、外面頸部〜体部刷毛目。内面口頸部ハケ目後横ナデ、体部ヘラ削り後ナデ。	緻密 砂粒・白色針状物質	にぶい褐色	第2地点
12−5	土師器 甕	(15.2) — —	外面口縁横ナデ、外面頸部〜体部刷毛目。内面口頸部ハケ目後横ナデ、体部ヘラ削り後ナデ。	緻密 砂粒・白色針状物質	にぶい褐色	第2地点
12−6	土師器 甕	— — 9.0	外面体部上位ナデ、赤彩？外面体部下位ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。上端輪積み痕、刻目あり。	密 砂粒	にぶい褐色	第2地点
12−7	土師器 台付甕	— — —	外面ハケ目。内面胴部ナデ、脚部ハケ目後ナデ。	緻密 砂粒・白色針状物質	にぶい赤褐色	第2地点
12−8	土師器 台付甕	— — —	外面ハケ目。内面胴部ナデ、脚部ハケ目後ナデ。	やや粗 砂粒・小石・白色針状物質	にぶい黄褐色	第2地点
12−9	土師器 鉢	— — (2.8)	外面ミガキ。底部中央ナデ。内面ヘラ削り後ナデ。	緻密 砂粒・白色針状物質	にぶい褐色	第2地点
12−10	土師器 器台	— — —	外面ハケ目後ミガキ。内面器受部ミガキ、脚部ナデ。器受部底面穿孔。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 黄褐色 内器受部 赤褐色	第2地点
12−11	土師器 高杯？	— — —	内外面調整不明。脚部穿孔。	粗 小石	にぶい褐色	第2地点
12−12	土師器 高杯？	— — —	外面ミガキ。内面脚部ナデ。脚部穿孔。	密 小石	赤褐色	第2地点
12−13	土師器 高杯	— — —	外面ヘラ削り後ミガキ。内面粗いヘラ削り後ナデ。	密 小石	橙褐色	第2地点

挿図番号	器種	法量(cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
12－14	土師器 高杯	— — —	外面ヘラ削り。内面粗いヘラ削り。	密 砂粒・小石	灰褐色	第２地点
12－15	土師器 甕	17.4 — —	内外面口縁横ナデ。外面体部ヘラ削り。内面体部ヘラ削り後ナデ。	緻密 砂粒	にぶい橙褐色	第２地点
12－16	土師器 甕	— — 9.2	外面体部～底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	やや粗 砂粒・小石	外 黄白色 内 にぶい黄褐色	第２地点
12－17	土師器 杯	— — 5.8	外面体部上位回転ナデ、体部下位ヘラ削り、底部回転糸切り未調整。内面ナデ。	緻密 白色針状物質	黄白色	第２地点
12－18	土師器 壷	— — —	外面口縁横ナデ、頸部ハケ目後ナデ。内面ハケ目後ナデ、赤彩。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 赤褐色	第２地点
12－19	土師器 壷	— — —	外面口縁ハケ目後横ナデ、頸部ハケ目後ナデ。内面ミガキ	密 砂粒・白色針状物質	にぶい褐色	第２地点
15－1	土師器 壷	(13.8) 4.4 (7.0)	外面体部上位回転ナデ、体部下位～底部ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	17T
15－2	土師器 杯	(12.8) 3.9 (7.4)	外面体部上位回転ナデ、体部下位ヘラ削り。底部回転糸切り後一部ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・小石・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	17T
15－3	土師器 杯	(12.8) 3.6 (7.0)	外面回転ナデ。底部回転糸切り未調整。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	表面調査
15－4	土師器 杯	— — (6.6)	外面回転ナデ。底部回転糸切り後外周一部ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	17T
15－5	土師器 杯	— — (6.8)	外面体部～底部ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	17T
15－6	土師質土器 高台杯	— — (9.9)	外面回転ナデ。内面杯部ミガキ、黒色処理。内面台部回転ナデ。	密 砂粒・小石・白色針状物質	外 黄褐色 内 黒色	19T
15－7	須恵器 甕	(24.0) — —	内外面口頸部回転ナデ。外面体部タタキ。内面体部ヘラ削り後ナデ。	緻密 砂粒・小石	外 黒褐色 内 暗灰色	17T
15－8	土師器 甕	(19.6) — —	外面口縁横ナデ、頸部ヘラ削り。内面ナデ。	やや粗 砂粒・小石	にぶい褐色	表面調査
16－1	土師器 甕	18.0 23.5 7.0	内外面口縁横ナデ。外面頸部ヘラ削り、体部ヘラ削り後一部ミガキ。底部ヘラ削り。内面頸部～体部ヘラ削り後ナデ、輪積み痕。	密 砂粒・小石・白色針状物質	赤褐色	寄贈資料

表３　出土石器観察表

挿図番号	分類用途	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	石質	備考
13－1	打製石鍬	9.6	11.9	2.0	緑泥片岩	２次調査
13－2	打製石斧？	—	7.0	2.0	粘板岩	２次調査
13－3	太形蛤刃石斧	—	5.9	3.3	粘板岩	２次調査

表４　出土土器観察表（弥生土器）

挿図番号	文様調整の特徴	胎土	色調	種別	備考
14－1	外面直前段多条Ｌ３Ｒ。内面口縁Ｌ３Ｒ、頸部ナデ。	やや粗 小石・白色針状物質	にぶい赤褐色	壷 桜井式？	SI03
14－2	外面直前段多条Ｌ３Ｒ。内面口縁Ｌ３Ｒ、頸部ナデ。	密 小石	にぶい褐色	壷 桜井式？	第１地点
14－3	外面平行沈線（5mm）による重三角文。内面調整不明。	粗 小石	外 灰褐色 内 灰白色	壷 桜井式	第１地点
14－4	外面平行沈線文（3mm）による重弧文。内面ナデ。	粗 小石・白色針状物質	にぶい暗褐色	壷 桜井式	SI02
14－5	外面平行沈線文（3mm）による重三角文。内面ナデ。	密 砂粒	外 にぶい暗褐色 内 灰褐色	壷 桜井式	第２地点
14－6	外面平行沈線文（3mm）による重三角文？直前段反撚LL。内面ナデ。	密 小石・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	壷 桜井式	第１地点
14－7	外面ヘラ描沈線区画磨消縄文（直前段多条？）内面ナデ。	やや粗 砂粒・小石	黒灰色	壷 枡形囲式？	第１地点
14－8	外面ヘラ描沈線区画磨消縄文（ＬＲ）、無文部ミガキ、重三角文？内面ナデ。	やや粗 砂粒・小石		壷 枡形囲式？	第２地点
14－9	外面結節文区画附加条第１種ＬＲ＋Ｒ、無文部ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	密 小石	外 褐色 内 黒色	甕 桜井式	第２地点
14－10	外面列点文区画直前段多条（Ｌ３Ｒ）、無文部ミガキ。内面ミガキ。	密 砂粒	外 黄白色 内 黒色	甕 枡形囲式	第２地点
14－11	外面直前段多条（Ｌ３Ｒ）。内面ナデ。	粗 砂粒・小石	にぶい暗褐色		第２地点

写　真　図　版

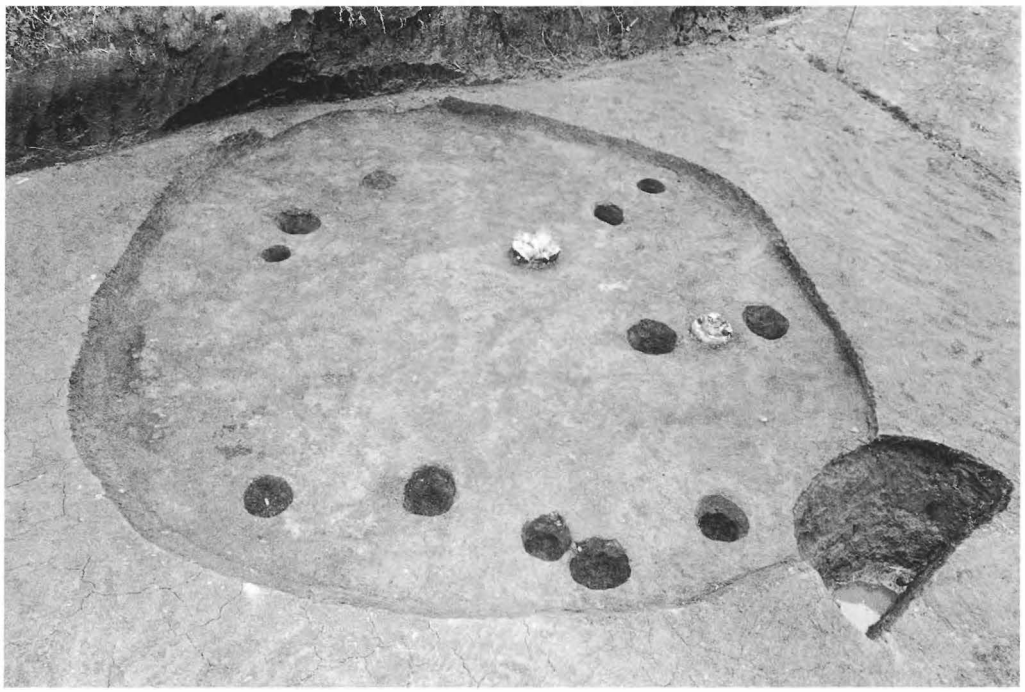
第１地点調査区全景（東から）

ＳＩ０１

図版2

ＳＫ０１

第２地点調査区全景（東から）



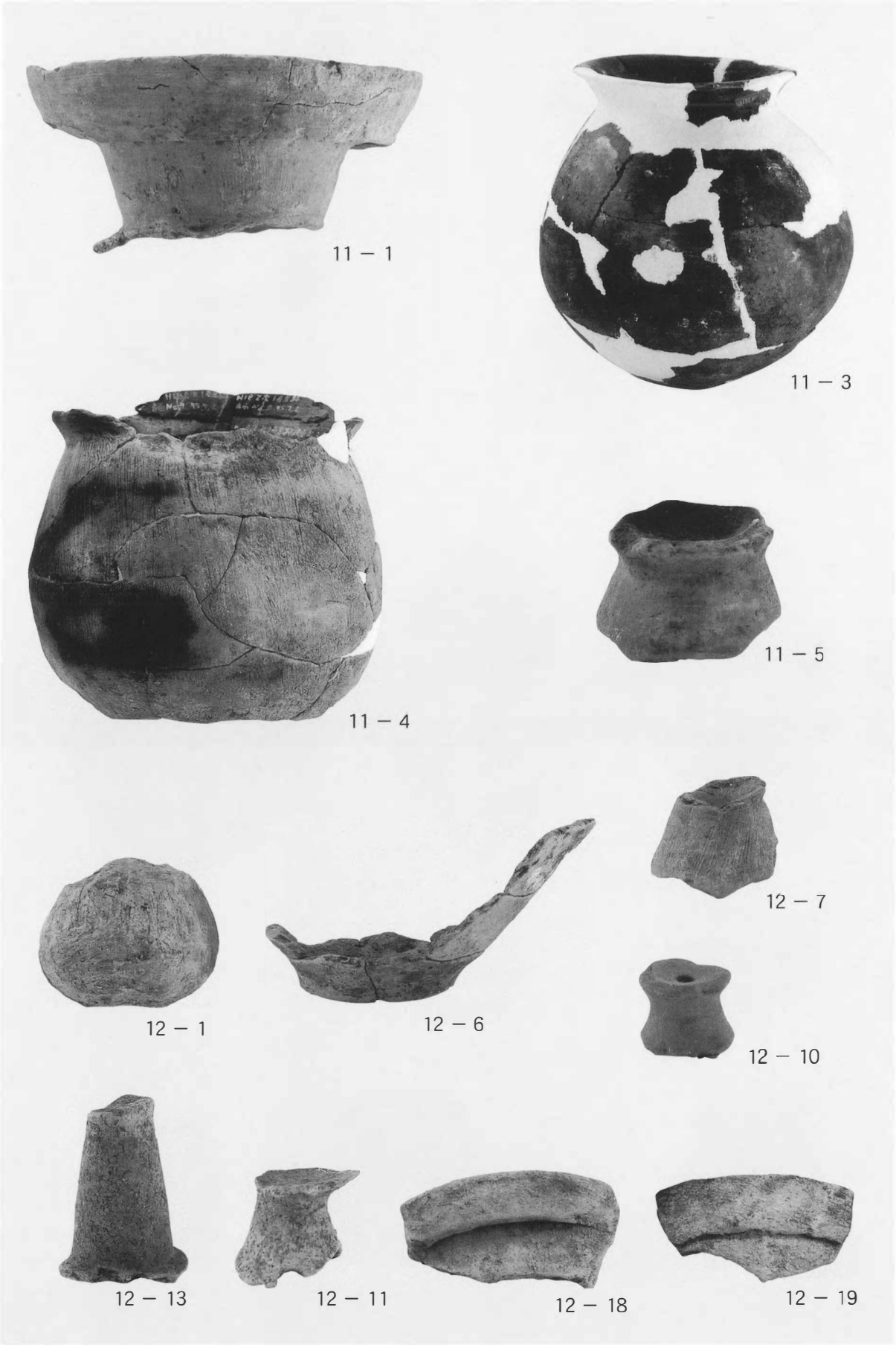
ＳＩ０３

ＳＩ０３遺物出土状況①

図版4

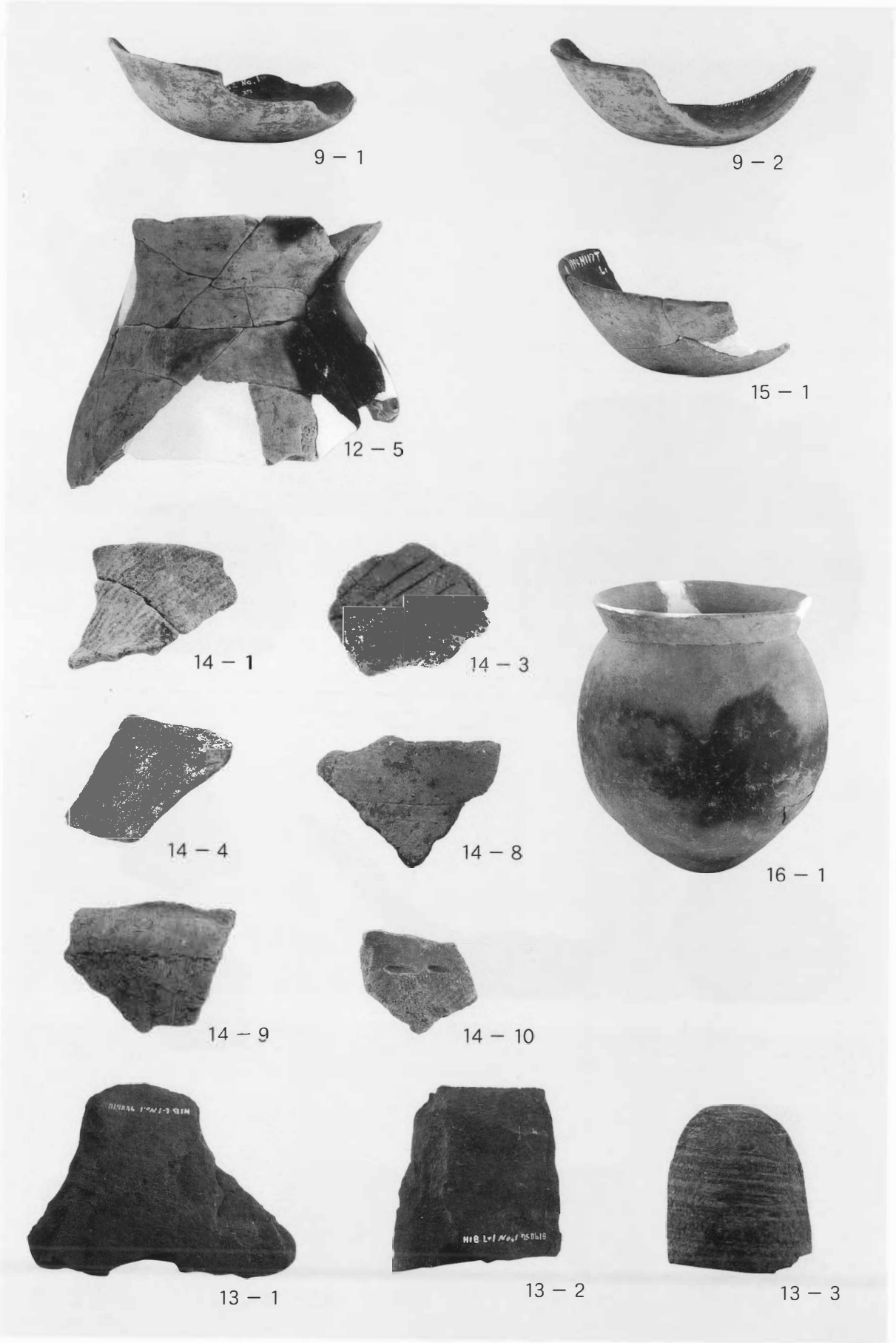
ＳＩ０３遺物出土状況②（図11－１）

ＳＩ０３遺物出土状況（図11－３）



出土遺物①

図版6



出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	ひがしひろはたＢいせき
書名	東広畑Ｂ遺跡
シリーズ名	小高町文化財調査報告書
シリーズ番号	第４集
編著者名	川田強
編集機関	福島県相馬郡小高町教育委員会教育総務課
所在地	〒979-2111　福島県相馬郡小高町仲町二丁目 82 番地
発行年月日	２００２．３．２９

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査面積 (㎡)	調査原因
東広畑Ｂ遺跡（ひがしひろはたいせき）	小高町小高字東広畑（おだかまちおだかあざひがしひろはた）	07563	67	37°34′07	140°59′07″	172	道路工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東広畑Ｂ遺跡	集落・散布地	弥生・古墳・奈良・平安	住居跡 土坑	弥生土器・土師器・須恵器・鉄滓	古墳時代前期、平安時代の住居跡

小高町文化財調査報告書第４集

東広畑Ｂ遺跡

2002年３月　発行

発　行　福島県相馬郡小高町教育委員会
福島県相馬郡小高町仲町二丁目82
☎（0244）44－4114㈹

印　刷　株式会社まつざき印刷
福島県双葉郡浪江町高瀬根木内100
☎（0240）34－6655㈹